

**地域情報（県別）****【奈良】内科医の夫と夫婦揃っての保健文化賞受賞は初-岡本和美・岡本内科こどもクリニック医師に聞く◆Vol.3**

皇后陛下から「小児科医もされながらの育児は大変でしたね」と労われる

m3.com地域版

岡本内科こどもクリニック（桜井市）の小児科医として地域の子どもたちの健康づくりに貢献している岡本和美氏。2023年には児童虐待防止活動が評価され第75回保健文化賞を受賞し、天皇皇后両陛下と対面した。両陛下とした育児の話、女性医師が仕事と育児を両立することについての見解、保険文化賞の受賞後に考えたことなどについて岡本和美氏に聞いた。（2023年2月28日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

——2023年12月21日に第75回保健文化賞の受賞者と天皇皇后両陛下との対面がありましたが、その際の様子を聞かせてください。

第75回保健文化賞の受賞者は13人で、そのうち団体が10件で個人はわずか3人の受賞でした。2019年に内科医で夫の岡本新悟が第71回保健文化賞を受賞した際に天皇皇后両陛下の拝謁に同行したので様子は分かっていましたが、やはり拝謁は特別なことなので緊張を感じていました。ちなみに、夫婦揃っての保健文化賞の受賞は初めてのことでそうです。



岡本和美氏

当日は、明治記念館や皇居など由緒ある場を晴やかな思いで経過した後、緑深き木々の間を通り抜け、セキュリティが厳しい門を何力所か通って、両陛下がお住いの御所へと移動し漸くその一間に入室しました。両陛下を待つ室内は張り詰めた厳粛な雰囲気でお音一つせず静まり返っていました。人間みな同じと思う世代の私も日常では感じる事のない緊張感で胸が高鳴っていました。そんな雰囲気の中、ドアが開き薄い御簾の向こうから両陛下が入場して来られました。

拝謁はまず天皇陛下からのお言葉の後、両陛下が受賞者の前に進まれ順に会話が始まりました。私の番になって、両陛下が並んで私の前に立たれました。恐れ多い気持ちで緊張が極限に達するであろうと思っていましたが、不思議なことに両陛下のお姿を間近に見ると、ふっと親しみが感じられ一気に緊張感が和らぎました。私は、児童虐待の悲惨な内容は晴れやかな場にふさわしくないと考えて、育児と関連づけて話すことにしました。



岡本新悟氏（左）と岡本和美氏（右）菊御紋灯の下で

#### ——天皇皇后両陛下とは、育児についてどんな話をしたのですか。

天皇陛下がまだ皇太子殿下だったころ、3歳になった敬宮愛子様の教育方針についてお話をされたことが当時のニュースになっていました。その際に、アメリカの家庭教育学者ドロシー・ロー・ノルトの『子どもについての詩』を朗読されたことを覚えていました。そこで私は、詩の一説を引用しながら、両陛下にこう申し上げました。

「子どもは自分のことを誰かが見ていると意識することによって自分の存在価値を確認し、頑張るって良い人間、価値ある存在になろうと思います。その反対に、誰からも関心を持たれずに育った子どもは、自分はいなくてもいいんだと思うようになり、自尊感情が低くなってしまいます。自尊感情が高い人は幸福感や人生への満足感が高く、自律的で対人関係も良好な人が多いとされています。逆に自尊感情が低い人は抑うつ的で人生への不安感が高く、他者に依存的で影響を受けやすい傾向があるとされています。児童虐待の背景には、未熟なまま大人になり親になったことが要因の一つだという考えもあります。子育てで大切なことは親が子どもに対して、あなたはとても大事な存在ですよと教えることです。全国のお母さんが天皇陛下のように愛情を込めて育児をされると、子どもたちは立派な大人になると思います」——すると天皇陛下は、「ああ」と大きくうなずかれてご納得の表情をされました。

皇后陛下は、「教育委員もされていたんですね」とおっしゃったので、思春期の調査と対応について説明し、また5人の育児の話をする、「小児科医もされながらの育児は大変でしたね」とお言葉をいただきました。

最後に「虐待が減らず日々悩み続けております」とお伝えし、付き添いの夫は、「妻の26年間の活動を尊敬して見守っていました」と言ってくれました。両陛下とも育児の話に大そう関心を持たれていたのも、もっともっと話していたいという余韻を残しながら対面が終了しました。私が緊張をすることもなく育児の話であればずっと話したいと思ったのは、国民の近くに皇室を築きたいという両陛下のご姿勢があったからではないかと思いました。

#### ——皇后陛下から「小児科医もされながらの育児は大変でしたね」と労いの言葉がありましたが、仕事と育児の両立は大変でしたか。

大学卒業後に、東京慈恵会医科大学と当時から小児科専門病院としてとても有名だった国立小児病院（現、国立成育医療研究センター）の感染・免疫・アレルギー科で最先端の医学と医療を研修することにしました。当時、3歳の子

どもと生まれて間もない赤ちゃんがいましたが、自宅と保育園と病院を最短距離で移動し、時には夜更けに子連れで実験室に通い詰めるという日々を送っていました。

こんな状態だったので、常勤の医師ではなく時間的に自由のある無給医として働いていましたが、存分に研究が続けられ学ぶことに無我夢中で、苦勞だと感じたことはありませんでした。頑張った成果として医学博士号を取得することができましたが、今から考えると子どもに犠牲を強いたと心苦しく思うこともあります。この時期の仕事と育児の両立の経験が後に女性医師の働き方改革の仕事につながりました。

——第75回保健文化賞では女性の働き方についての活動が評価されていますが、行ってきたことを聞かせてください。

育児と仕事の両立の経験がかわれて、これまでに日本医師会女性会員懇談会委員（1998～2006年）、日本小児科学会女性医師職域改善委員会委員（2001～2012年）、奈良県男女共同参画県民会議会長（2002～2012年）、奈良県勤務医部会女性医師委員会会長（2006～2012年）を務めてきました。

2005年7月に行われた日本医師会の「第1回男女共同参画フォーラム—女性医師は何を求め、何を求められているか—」にはシンポジストとして参加し、女性医師の働き方を改善するとともに復職を推進するためには、上司やパートナーなど周囲の男性の理解が最も重要だということをお話しました。

また講演会では、女性医師が妊娠や出産、育児が理由となって解雇されたり自ら離職すること、仕事のために子どもとの生活を犠牲にしたり産むことを諦めたりすること、母親としての立場が守られず不安定な勤務実態が存在していることなどについて話し、女性が働きやすい職場環境を整備することが必要だと訴えました。



講演会の様子

——「母親としての立場が守られず不安定な勤務実態が存在している」とは、どのようなことが教えてください。

母親としても、女性医師としても双方を100%こなすことは不可能で、状況によって二者択一を迫られる事態が起こってきます。女性医師の場合は、2人目の子どもを産むか研究を続けるかの選択を迫られ悩むというケースがよくありました。

ある医科大学の女性教授と話す機会があって私が、「女性であっても大学教授になり、第一線で活躍されていることがうらやましい」と話すとその教授は、「岡本先生のように、5人のお子さんがいらっしゃる方がうらやましいわよ。私には子どもが1人だけ、研究を続けるために子どもを産み育てることを諦めたの」と言われました。研究を犠牲にするのか、子どもを犠牲にするのか、その選択をしなければいけないことに問題があると考えています。

また、日常生活の中でも仕事と育児を両立しているといついつい子どもに、「お母さんは仕事が忙しいから、ちょっとあっち行ってなさい。また後でね」と言ったり、保育園や幼稚園、学校の参観日や行事に行けないことがあります。これは、子どもに犠牲を強いていることになるので、そういう意味では、真の児童虐待に該当しなくとも、児童虐待につながっていると言えるケースはあるのではないかと考えています。



岡本和美氏と子どもたち

——第75回保健文化賞を受賞したことで児童虐待について思うことがありますか。

今回、保健文化賞という大きな賞をいただいたことで、児童虐待防止への思いがさらに強くなりました。児童虐待の内容は、年々エスカレートしています。狂気としか思えない異常な人間性に対して激しい怒りとともに将来への憂いを感じ、なんとかしなければという責任感が大きくなりました。

「岡本先生は保健文化賞をもらったけど、その後はどうしているの」と言われないように、児童虐待防止活動はもちろん、それ以外のことにも目を向け、少し大げさに言えば、残りの生涯を一点の悔いもなく前を向いてしっかりと踏みしめて歩いていきたいと決意を新たにしました。



バングラデシュでの医療援助活動

今はグローバルな時代ですから、以前から夫とともに支援している海外医療援助にも力を入れていきたいと思っています。バングラデシュでは、児童虐待どころか多くの子どもたちが貧困のため栄養失調や単純な感染症で困っている様子を見てきました。

将来は海外を拠点とした活動も展開していければと夢は大きく膨らんでいます。

◆岡本 和美（おかもと・かずみ）氏

1972年に奈良県立医科大学を卒業し、東京慈恵会医科大学小児科学教室助手、国立小児病院（現、国立成育医療研究センター）感染・免疫・アレルギー科。1981年天理よろす相談所病院小児循環器科、1986年奈良県立医科大学附属病院病態検査科非常勤講師、1980年から岡本内科こどもクリニック。医学博士、日本小児科学会認定小児科専門医、日本感染症学会認定感染症制御ドクター、桜井市要保護児童対策地域協議会会長、桜井市こども子育て会議会長、元・奈良県医師会理事、元・奈良県教育委員長。

【取材・文・撮影＝竹花繁徳（写真はクリニック提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

